「まあマスコミの質問などというものは質問されるかたにとってもいやなものでありふれているものなのでご勘弁ください。最初はやはり直木賞受賞のご感想からうかがいたいのですが」

「そうですね」市谷は(候補になって)何回か候補に首を傾げた。[illegible]以来受賞した際のこのての質問に対する答のきいた答弁をいく通りも考えてはいたのだが、あまりたくさん考え過ぎたためか

大いなる

笠井叡

筒井康隆（つつい・やすたか）
1934（昭和9）年大阪に生まれる。57年同志社大学文学部卒業。60年SF同人誌「NULL」を発行，処女作「お助け」が江戸川乱歩に認められ，執筆活動に入る。著書に「東海道戦争」「アフリカの爆弾」「家族八景」「メタモルフォセス群島」「私説博物誌」など多数。

大いなる助走
昭和五十四年三月十五日　第一刷
定価　八八〇円
著者　筒井康隆
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五・一二一一
印刷　凸版印刷
製本所　矢嶋製本
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します
© Yasutaka Tsutsui 1979
Printed in Japan

大いなる助走／目次

ACT 1　5
ACT 2　59
ACT 3　109
ACT 4　175
ACT 5　227

装幀　山藤章二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大いなる助走

ACT 1

ACT 1／SCENE 1

行進曲「旧友」が聞こえてくる。近所のパチンコ屋からである。パチンコ屋はこの「旧友」はじめ「君ヶ代行進曲」だの「軍艦マーチ」だのを含む同じ行進曲を三十分に一度くらいのローテーションでもってが鳴り立てる。いい加減いらいらするだろうと思って保叉一雄は同情するのだが、神経が図太いのか音痴で同じ曲ばかりだということがわからないのかそれとも行進曲が好きなのか、鱶田平造は平気で窓を開け放し、騒音の中で一日中原稿を書き続けている。騒音は行進曲だけではない。時おりパチンコ屋の店員の、何を言っているのかさっぱりわからないアナウンスも入る。

「ええらっしゃいませ。ええらっしゃいませ。え本日の来店りとございます。え本日うちろめないまいのさいですまいです。なおおてないのまえにおおりょくの、ひますからもありますか。れすか。れすか。りとございます。りとございます」

うすっぺらな座布団の上の正座に耐えられなくなって身じろぎし、自分でもそれがちょうど身をくねらせているように感じられたので、ついでのことに保叉はまた鼻を鳴らした。「ねえ先生。お願いしますよ。先生に書いていただかないと箔がつきません。五十枚。五十枚がご無理でした

ら四十枚でも。三十枚でも」

「わはははははは」保叉に背を向けたまま机に向かっている鱶田が機嫌よさそうに笑った。「今からではとても無理だなあ。四日までには『焼畑センター街ニュース』に読切十二枚、『焼畑商工業新聞』の連載が毎回五枚の計十五枚、『焼畑市報』のエッセイ十六枚半、『焼畑税務署だより』にエッセイ三枚書かにゃならんのよ」

流行作家を気取っているわけであるが、掲載誌紙名や枚数をきちんと憶えているところなど逆にまったく流行作家らしくなく、鱶田自身はそれに気づいていない。巨大草食獣の臀部を想わせる鱶田の尻を嫌悪の眼で見ながら保叉はよくまあこの古い木綿のひとえものが尻の真ん中で裂けないものだと、いつものように感心した。肉のだぶついた鱶田の尻はぐしゃりと左右へ拡がり、座布団からはみ出してそのはみ出した部分が垂れ下がっているのである。

「でも、先生の筆力なら、それぐらいは」無理に顔を歪めて笑顔を作り、保叉はいった。笑顔で喋っているか仏頂面で喋っているかが、なぜか鱶田にはわかるらしいのだ。「そうでしょう先生。五十枚や百枚、それぐらいは先生なら」襖をあけ、鱶田の妻が茶を持って入ってきた。入ってきたといっても本でいっぱいの四畳半、客の保叉が座ってしまうともはや彼女が足を踏み込む余裕さえなく、進めるだけ進んで手をのばし、茶を盆ごと保叉に手渡すしかない。

妻のいる前で編集者にへいこらされると、眼に見えて鱶田の機嫌がよくなることを保叉は知っている。彼はまた鼻声を出した。「先生が書いてくださらないと、雑誌にでかい穴があいてしまうんですよ。なんとかお願いしますよ」

「しかたがないなあ。もっと早く言ってこないからいかんのだ」ゆっくりと保叉に向きなおり、獅子鼻から鞴(ふいご)のように息を吹き出して鱶田はいった。「じゃあ、三、四十枚のものでよけりゃあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いやあ。助かったあ」保叉は大袈裟に喜んで見せ、わざとハンカチを出して額を拭った。「これで次の号が出せる」

鱶田の妻は入ってきた時のままの仏頂面で茶の間へ去った。その仏頂面がうだつのあがらぬ地方文士の亭主に向けられたものか、四十面下げてまだ文学同人誌などを主宰している自分に対しての軽蔑の意味を持つのか、保叉にはわからなかった。どちらにしろ、これ以上の芝居は馬鹿ばかしいと思い、保叉は足を投げ出してがらりと口調を変えた。

「いい原稿がなくて困っちまうよ。いいものがなきゃ、無理して出さなくてもいいってよく言われるけど、やはり同人雑誌評の選者に忘れられても困るからね」

「なあんだ。今日はもうやめるのか。もう少しいい気分にしておいてほしかったのに」原稿を引き受けるなり保叉が芝居を中断したので鱶田はやや不機嫌になり、煙草に火をつけながら鼻を鳴らした。「するとおれに頼みに来たのは、雑誌の体裁を整えるためか」

「まあ、早く言えばいつも通りのページ数にするためだ」率直に、保叉はいった。「ページ数を落すと、原稿を載せてやらなかった同人がうるさいのでね」

「しかしお前さんもよくやるよなあ」鱶田は書棚を眺めた。

書棚は材質造作大小さまざまのものが両の壁ぎわに並んでいて、ところどころ五分板を組み合わせただけの部分もあり、棚のいちばん上に横に積み重ねられた書籍がほぼ天井にまで達しているところもあるから、地震がなくてさえいつ崩壊するやら予測がつかず、はなはだ物騒である。片方の書棚の中ほどの段には「焼畑文芸」のバック・ナンバーが全冊揃っている。だいたい一年に四冊出し、約十五年続けたわけだから、ほぼ六十冊になる。ずらりと並んだ「焼畑文芸」には三冊に一冊の割で鱶田の書いたものが掲載されており、その号だけは書棚から取り出しやすいよ

うに他の号よりも少し背表紙を突き出して並べてある。他にも県内の同人誌数種が号数とびとびに並んでいる。また、大出版社の文芸誌も数冊ある。ここに並んでいるこれらの同人誌や商業誌には、すべて、鱶田の寄稿した小説や雑文が掲載されていて、たまに誰かがこれらのうちの一冊をとり出して見ようとすれば、しぜんと鱶田の名前の出ているページがどういう仕掛けかわからないがぱらりと開くように細工されている。ただし中央の文芸誌への鱶田の寄稿は小説ではなく、各県同人誌地図とか各地同人誌だよりとかいった特集の一部の署名記事である。

鱶田の書棚にあるそれ以外の本で、保叉の眼の届くあたりの書名を列記すれば次のようになる。

「焼畑市史」全一巻。
「大東亜戦史」全二巻。
「新約聖書」。
「スリ・万引の手口と対策」。
「第4類危険物取扱心得」。
「モーツアルト伝」。
「やさしい心理学」。
「現代用語の基礎知識」一九七一年度版。
「関東地方の迷信」及び類書二冊。
「太平洋古代大陸の謎」。
「西洋料理」。
「文芸年鑑」昭和四十九年度版。
「ネコの事典」。

「編集ハンドブック」及び類書二冊。
「日本の民話」全四冊。
「江戸川柳夜話」。
「実戦麻雀」。
「日本の文学」1。2。4。7。12。31。
「世界文学全集」8。9。11。14。29。
「茶の間のツボ療法」。

山本周五郎の謂う「汚い本棚」に類するものであって、書斎の主の興味の対象が那辺にあるかさっぱりわからない。それでも保叉のように鱶田の書いたものを読む機会の多い人間から見れば、これらの本がこの男の本棚に在ることも、まあどうにか納得することができるのである。「焼畑市史」は市報などに随筆を頼まれることが多い関係上その欠くべからざる資料であり、鱶田の蔵書の中では今までにもいちばん多く彼に原稿料を稼がせてくれた、いわば最も重要な商売道具ともいえる。市史全一巻というとずいぶん部厚い本のようだが実は二百ページにも満たぬ薄っぺらな本で、これは焼畑市が二十年ほど前までは「大字焼畑」であったことからもわかるように、ろくに市としての歴史を持っていないからだ。前史さえあまりなく、十ページでおさまる程度である。

民話、迷信の類の本が多いのは鱶田の大学での専攻が民俗学だったからであるが、だとすると今度は逆にずいぶん少いと言わねばなるまい。しかし誰でも自分が大学で専攻した学問の関係図書などあまり持っていないのが普通であるから、これも納得できぬことはないのである。保叉の書棚にしたってこれとたいして違わぬ有様だから、偉そうなことはいえない。

その他はすべて何か書かねばならなくなってその時その時に買った参考書であって、鱶田がどの小説にどの本を使いどの雑文にどの本を引用したかその大半が保叉にはわかる。ただし「実戦麻雀」や「ツボ療法」のように、参考書だか実用書だかよくわからぬものもある。たとえば鱶田が麻雀をしているところなど、保叉は一度も見たことがない。

こうした参考書、実用書にはさまれてあちこちに点点と小説らしいタイトルの本が散らばっている。その大半は鱶田の文学仲間の、多くは自費出版による本である。最近のベスト・セラーや文学賞受賞作などみごとに一冊もない。見識が高いともいえるが勉強不足ともいえる。

全部叩き売ったとしても背広一着買えるかどうか疑わしいそれらの書物を眺めまわすうち、この鱶田同様つぶしのまったくきかぬ道に踏みこんでしまったわが身を改めて憂う気分になり、保叉は溜息をついた。「あんたが同人をやめてから、おれだけでもう六年やったことになる。近頃は金の苦労に加えて原稿の苦労よなあ」

「焼畑文芸」はもともと鱶田と保叉、それに比較的早いうちに足を洗った二人を加え、計四人で創刊した同人誌だが、地方名士になった鱶田が会費不要の名誉会員になってしまってからはほとんど保叉ひとりで編集を続けているのである。

「もう抛り出したって、あんたぐらいになれば何か書きさえすりゃどこでも載っけてくれるのに」

おれひとりが職業作家になってしまえばもう用済みだといわんばかりの冷たい鱶田のことばに、そうはいかんのだ、と、また保叉は思った。保叉自身、たしかに一流文芸誌の新人賞最終候補にまで残ったことが二度あり、地方ではそれでも充分文士として通用はするものの、鱶田が「どこでも」というのはあくまで「県内のどの同人誌でも」という意味で、中央の文壇マスコミでの保

叉の存在価値はまだまだ単に地方同人誌の主宰者としてであるに過ぎないのだ。

「今、雑誌をやめてしまったら、同人達が困るだろう」途中で投げ出した鱶田への当てつけもあり、いかにも使命感に溢れているが如き口調で保叉はそういったが、それは一面真実でもあった。誰が困るといって保叉がいちばん困るのだ。文壇マスコミでの自分の存在理由がなくなるのもさることながら、今や「焼畑文芸」は彼の生き甲斐にもなってしまっている。雑誌をやめたら何をしていいかわからなくなり、発行日に迫られることもないからおそらく小説も書けなくなるだろう。それに、中途半端なままで文学を抛り出し、今さら妻にまかせっきりだった家業に戻るのも癪である。

「しかし本当は、こういうことは馬鹿ばかしいんだぜ。そう思わんか」保叉の顔色をうかがいながら鱶田はいった。「そうだろ。考えてみろよ。おれの原稿なんか載っけないで、同人のを載っけた方が、掲載料をとれるわけだろ。おれだって、よそに書けば原稿料がとれる」

保叉は唸った。鱶田が本気で原稿料を寄越せと言っているのでないことはわかるが、プロ作家にただの原稿を要求する保叉への厭味であることもまた確かである。

「だって、いい原稿がないから」保叉はまた鼻声を出した。「今さら水準を落すわけにもいかんし、高い会費を取ってる以上おれの小説ばかり載せるわけにもいかんだろうが」

「どうも『焼畑文芸』の話をしていると気が滅入る」片頬の肉を垂れ下がらせて鱶田は渋面を作った。「創作意欲が失せる。なんとかしてくれ」

保叉は苦笑した。「わかったよ」正座し、身をくねらせた。「そんなこと言わないでくださいよ先生。先生だけが頼りなんだから。先生の小説を載せると載せないとじゃあ、雑誌の重味が違ってしまうんですからね。批評家の先生たちだって、若い連中の青臭い小説ばかり載っていたんじ

ゃあ雑誌を手にとる気もしないでしょうけど、鱶田平造先生の新作が載っているとなりゃあ、これはやはり期待に胸おどらせて」
「うふふ。ふふう。むふふふふふ」鱶田が酒焼けした赤ら顔をさらに赤らめ、鼻孔をおっ拡げ、猪首になるほど盛りあがった肩の肉をゆすって笑いはじめた。「むふう。むふふふふふ」
「最近の同人誌には、安心して読めるものが少くなっていますからね。だから先生の名前が目次にあれば、これはもう誰だって安心して」
「うふふふふふ」鱶田は巨軀を上下に揺すって笑い続け、その揺すりかたを次第に大きくすると、やがてその上下動を利用して徐徐にからだの向きを変え、ついに机に向かってペンをとった。
「よーし。創作意欲が湧いてきたぞ。もっとやってくれ。実にいい気分だ。むひひひひひ」家へやってくる人間にはいつも必ず芝居の相手役を強制する自分の子供っぽい趣味がさすがに照れくさく、鱶田はちょっと気弱げな笑いかたをした。
「そりゃあ、先生が流行作家でおいそがしいということはよくわかっております」馬鹿らしさに耐えながら、ここでもうひとふんばりとばかりに保叉は声を高くした。「なにしろ先生は小説を書かれてもエッセイを物されても超一流。原稿依頼が殺到するのも当然です」
「そうなのだ。おれは流行作家なのだ」うるんだ眼をして鱶田は自分にそう言い聞かせ、ひとつ大きくうなずいてから猛然とペンを走らせはじめた。「書く」
「そうです。鱶田先生は流行作家です。そうでなきゃいけません。そういう具合に決然と、書く、とおっしゃらなければいけません。そうです。そうなのです」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com